

平成17年度 一般財源研究費傾斜的研究費(全学分)研究報告書

研究テーマ [①大都市の課題解決につながる研究 ②教育改善研究 ③若手研究者奨励研究]

研 究 課 題 名	理工系基礎ゼミナールの総括と次年度の展望	
研究者または研究代表者名	所属部局名	職 名
鈴木 徹	都市教養学部理工学系	教 授
研究分担者名	部局名・所属研究機関名	職 名
高桑昇一郎	都市教養学部理工学系	教 授
清水 敏夫	都市教養学部理工学系	助教授
相垣 敏郎	都市教養学部理工学系	教 授
渡辺 恒雄	都市教養学部理工学系	教 授
松平 晏明	都市教養学部理工学系	教 授

研究実績の概要 (600～800字で記入。図、グラフ等は記載しないこと。)

新大学の開始に伴う新しいカリキュラムとして基礎ゼミナールが本年度より開始された。この科目は、全学的にはこれまでのカリキュラムにない全く新しい試みであり、科目のテーマや目的などの内容面、クラス編成・教室設備などの組織・運営面でも、多くの試行錯誤を経ることが避けられないと予想された。この経験を今後の基礎ゼミナールに生かすため、理工学系の担当者が本年度前期に実施した基礎ゼミナールを総括することが本研究課題の目的であった。また、この総括に基づき、来年度のために必要と思われる準備を行うための予算を申請した。

実際の総括は、1) 各担当者に対するアンケートの実施、2) 担当者による総括の会合、の二点を実施した。後者の会合ではアンケート結果を参照しながら討論を行ない、本年度の基礎ゼミの成果と問題点を洗い出した。この総括を来年度に生かすために、アンケートの結果と総括のまとめを作成し、理工学系の委員を通して全学の基礎ゼミ部会に提出した。ここで出された意見は、18年度の基礎ゼミを組織する過程で生かされている。

また、傾斜予算は、18年度基礎ゼミにおいてプレゼンテーションに使用される器具の購入、および理工学系のいくつかの基礎ゼミの具体的準備を行うための資料購入などに充てた。

参考資料として、
A) 理工系基礎ゼミナール総括の集まりのまとめ
B) [理工系基礎ゼミナール総括の集まりのためのアンケート] まとめ
を添付する。

【添付資料A】

理工系基礎ゼミナール総括の集まりのまとめ

本年度より開始された基礎ゼミナールは、全学で74テーマにおいて実施され、総履修者数は1600名強に達した。このうち理工学系の担当者によるテーマ数は15、履修者数も288名と最も多かった。

本年度の基礎ゼミナールの経験を来年度に生かすため、その総括を行うことを目的として、教育改善の傾斜配分予算申請を行なった。この中で、担当者へのアンケートを実施するとともに、総括のための担当者の集まりを7月26日（火）にもち、アンケート結果を参照しながら、本年度の基礎ゼミについての問題点や来年度への改善についての議論を行なった。以下はその集まりでの議論を、アンケートの項目に沿って整理したものである。各項目では、まずアンケートの結果に基づく全般的な傾向を簡単に述べ、関連する個別的な議論については「・」以下に加えた。（なお、当日参加できなかったため、メールで寄せられた意見も関連箇所に加えている。）

〔補足〕全学の担当者による本年度の基礎ゼミに関する意見は、7月基礎教育部会・基礎ゼミ部会の参考資料（青塚委員による）があり、今回の集まりの議論や、アンケート資料におけるコメントと重なる部分も多い。

研究代表者 鈴木 徹

研究分担者 高桑昇一郎、清水敏夫、相垣敏郎、渡辺恒雄、松平晏明

〔1〕基礎ゼミの登録状況など（アンケート項目1）

○クラス人数

全学平均では74クラスでクラス当たり平均21.8人に対し、理工系担当は15クラス、平均19.2人で全学と大きい差はない。この中には履修者2名のクラスがあった一方、教室の定員28名に達するものも4クラスあった。人数については次のような意見が出された：

- ・クラスの人数は基礎ゼミの実施効果にある程度の影響を与える。教室制限の28人のクラスは、基礎ゼミの授業形態としては多すぎるとの意見が大半であった一方、2名程度のクラスでは基礎ゼミとして成り立たないとの意見が出された。10名程度でうまく実施できたとの意見が複数あった。少なくとも5～6名、多くとも20名前後のサイズ以下が望ましい。
- ・クラス分けに用いた希望でみれば、希望者が最小のクラスでも25名程度はあったということであり、クラス分けの方法について少し工夫をすれば、アンバランスを防ぐことは可能。（人数が少ないこととテーマ内容—例えばテーマが専門的—との相関は必ずしも明確ではない。）
- ・但し10名程度でも、テキスト輪講形式のゼミでは、学生の集中力が維持できないとの意見もある。履修人数に対応して、ゼミの形式にある程度融通性が必要か。

○分野構成

クラスの構成は、理工系所属の学生が半数弱で、人・経・法は約1／6。この数字はゼミのテーマから考えて不自然なものではない。ただし、これらは一様に分布するのではなく、15クラスのうち10クラスは理工系が大部分を占め、残り5クラスは各学部・学系に分散した。

- ・文系・理系が混在するという前提でテーマを立てて、その予想通りとなったクラスがあった反面、文系からの参加を予想したにもかかわらず理工系中心のクラスもあった。

○出席状況

必修授業でもあり、出席率はいずれも90％以上と高かった。ただし、最初のみ出席して、あとは

欠席という学生が（１名）いるクラスがかなりあった。

- ・人数が多いと目立たないため、相対的に責任感もうすく、欠席にも結びつく。

○テーマと専門性の考え方

基礎ゼミのテーマ設定にあたって、専門性をどう考えるかは検討の余地がある。専門性を全く切り離す、あるいは逆に非常に専門的な内容、という極端な場合はなかった。実際は、両極端間のさまざまな中間段階が設定されている。

- ・すでに初年次に基礎ゼミのように、全員が調査・発表を行うカリキュラムを組んでいる教室もあり、両者の相対的な位置づけの検討が必要とされた。（電気：フレッシュマンセミナー）
- ・基礎ゼミは専門的内容を教授するのではなく、学生の積極性を引き出すことに重点があると位置づけて、専門課程での授業と区別する。
- ・学生はその分野の専門家になるとは限らず、社会へ出る準備として学生をサポートするという位置づけがある。この点に関して、担当者間でよく検討し了解しておくことが重要。

○その他

- ・シラバスの書き方。工夫をしても、必ずしも呼んでいない学生もある。シラバスをきちんと読んでゼミを選択するよう指導する必要がある。

[2] 設備、サポート体制、など（アンケート項目２、および５D）

○利用設備等

教室設備・機器などについて、基礎ゼミ開始後いろいろな不備が指摘された。関係者の努力を認める意見とともに、基本的な見直しを求める声もあった。とりわけ、担当者への連絡体制が十分ではなく、機器の貸し出し等についての変更が最後まで伝わっていないことも明らかになった。以下の問題では、対応する窓口が分かれていることも原因の一つと思われる。

実際の利用状況は、PC・プロジェクタの利用が相対的に多いが、これは他の機器についての案内が十分でなかったことも影響しているだろう。なお、（プレゼン用に）自前のPCを利用した担当者も多かった。

- ・28人のクラスが多いが、基礎ゼミにとっては教室が狭い。（実際には、机を並べ替えたり、プレゼンのために場所を空けたりする必要がある。）
- ・PCの貸出については、当初5台限りということで不足した。実際にはあとで10台、さらにはそれ以上の貸出も可能になった。
- ・プリンタ出力も最初は不可能とのことだった。コピー機も同様で、最終的に6号館で利用可能になったことも伝わっていない。情報の通知がもっと必要。
- ・プロジェクターのキーなど必要なものは6号館で貸し出せるようにしてほしい。
- ・計算機のIDについては、教務・センター・6号館とたらい回しになった例がある。例えば、担当教員全員に基礎ゼミ用IDを準備する、などの措置をとってはどうか。

○施設

少なくとも理工系担当の基礎ゼミについては、専ら6号館を利用した。図書館を利用することを呼びかけた例が数件あったが、学生の積極的な反応があまりなかった。

[3] 授業方法、内容、など（アンケート項目３）

基礎ゼミの目的に対応して、大半のゼミでは発表会・討論会を実施し、学生参加を実現している。また、とりわけ基礎ゼミの開始段階では、担当者による講義を行なったゼミが多い。このほか、外部施設見学や、フィールド調査に出かけた例もある。用いた資料はプリント配布が最も多く、これを毎回実施する場合は大きい負担となる。

○T A

理工系でT Aを利用したのは4つのゼミで、全体の一部に限られた。

- ・T Aを利用しなかったゼミでも、多人数のゼミでは担当者一名でカバーするのは困難であり、T Aの必要性がある。
- ・広い分野をカバーするため、T Aとして担当者と異なる分野の大学院生に依頼したとの報告あり。

○授業方法、グループ分け

多くのゼミではグループ分けを行なっている。但し、発表はグループ発表とともに、各個人の発表やレポートを併用しているゼミも多い。グループ分けは、学生同士の討論を促進するのに有効性がある一方、学生同士の相性に依存することや、大きいグループでは無責任になるという問題もある。また、学生同士あるいは教員と学生のつながりを促すには名前を知ることが役立ち、そのための工夫が紹介された。実際の授業の場では、この他にも担当者によりさまざまな工夫がなされている（アンケート3 F参照）。

- ・何を調べるかを議論させ、いくつかのグループに分けた。レジュメによる発表を実施し、他グループとの議論・批判が効果的に行われた。
- ・グループの中では、授業時間以外にも集まって発表準備を行っていた。一方、学部が異なると時間割が違うため時間外に集まりにくいという声もあった。但し、一年生では、学科のしぼりはあまりないので影響は相対的には小さい。
- ・途中まで個人中心にやっていたが、早くグループにする方が良かった。
- ・文系・理系の人々が接する機会としても有効である。
- ・グループの人数が増えると、何もしない人が出る。少ない人数の方が、さぼることができない。
- ・途中でグループ換えを行うと学生への刺激になる。
- ・最初にe-mailを調べ、全員にリストを配った。学生同士の議論・打合せに役立つ。
- ・人数が多い場合は座席指定や名札を利用することによって対応できる。

○その他

- ・来年度の担当者：継承性を考えると本年の担当者がもう一年継続することが望ましい。
- ・考え方、内容を公開し経験を交流する機会を設けてはどうか。例えば、公開発表会、担当者の議論、学生とのコミュニケーション、など。
- ・基礎ゼミは4年間の学部生活の中で位置づけられている。部分的な調査・発表は専門の中でも経験することである。学年の初めの段階、他学科・他学部の学生と一緒にであることの特質を生かす。

〔4〕評価について（アンケート項目4）

○評価に関しては、合格・不合格の判定では全ての担当者が出席状況を条件に含めており、一方、合格の場合の成績内容には、発表状況（レポート）が重要な条件になっている。これは大まかには基礎ゼミ準備段階で予想されていた考え方に一致している。

- ・G P Aとの関係：成績差をつけるのは難しい。
- ・合否判定にする可能性がある。一方、合否では学生の意識がどうしても甘くなりがちになる。
- ・担当者による評価の重点の違いをどう考えるか：個人発表、グループ、討論への参加、など。
- ・基礎ゼミの場合、到達点を設定するのは難しい
- ・再履修をどうするか、共通認識が必要。

○都市文明講座との関係（アンケート項目5 Bも含む）

アンケートにおいて、都市文明講座の意義を積極的に評価する意見はなく、むしろ見直し・再検討を求める声が大部分であった。これは主として、基礎ゼミの中で都市文明講座を位置づけている現状に対しての批判であると思われる。基礎ゼミと都市文明講座の内容、担当者、どちらをとっても、現在の方法の必然性が明らかではない。一方、学生が都市文明講座に参加してまとめたレポートについては、（基礎ゼミとの関係は別にして）評価する意見も出された。

- ・都市文明講座は基礎ゼミとの関連がない。今後は両者を分離すべきである。
- ・都市文明講座のレポートは、担当者が聞いていないので、評価できない。

[5] 基礎ゼミの評価（アンケート項目 5 A・C・E）

全学的には本年度から開始された全く新しい授業形態であったこともあり、設備やサポート体制が不十分であったり、授業の実施も試行錯誤の部分が多かったと思われる。それにも関わらず、理工学系アンケートでは、基礎ゼミの意義を評価する意見が2／3を占めた。また学生からの意見は、定量的な調査にはなっていないが、基礎ゼミを評価する声が多い。

[6] 傾斜配分予算の使い方

本年度の教育改善傾斜配分予算として、25万円が認められている。これは主として来年度の理工学系基礎ゼミのための準備に用いることを目的としている。具体的な使用方法として、次のようなものが提案されている：

- ・図書館にない書籍・資料の購入
- ・基礎ゼミで用いるUSBメモリーなど
- ・本年度の経験を今後の参考資料として保存

【添付資料B】

[理工系基礎ゼミナール総括の集まりのためのアンケート] まとめ

理工系基礎ゼミナール担当者向けアンケート
回答数 15 (2005年7月末に実施)

[1. 登録状況]

A) 登録者数 288名

○クラス人数内訳 (括弧内はクラス数)

1-5名 (1)、6-10名 (3)、11-15名 (2)、16-20名 (2)
21-25名 (2)、26-28名 (5)

○学部・学系内訳

都市教養人社 22名、経営 11名、法 15名、都市政策 0名
理工 125名、都市環境 28名、システム 51名、健康 22名

B) 出席状況 全てで90~100%程度 (人数×回数で大まかに見積もって)

[コメント]

- ・1名 都市教養 理工 機械の学生が初回に出席した後、残りの9回を欠席した。
- ・1名は最初のみ出席。以後の不参加理由は不明。
- ・人数が少ないので休みにくいのでしょうか。前半で2回欠席した学生も教員の注意よりグループの仲間に叱られて欠席しなくなりました。
- ・1名 (女子) 2回ほど欠席 (理由 体調不良) した以外はすべて出席した。
- ・ゼミ形式の授業で26名は多いと思う。
- ・理工に偏っている。⇒ クラス分けの意義は？
- ・自分がプレゼンテーションの当番になると、欠席してしまう子がいた。

◎参考：全学の登録状況

	月曜日	火曜日	金曜日	合計
開講数	28	20	26	74
履修者数	664	463	485	1612

クラス当たり人数

1-5人	6-10人	11-15人	16-20人	21-25人	26-28人
3	5	9	8	13	36クラス

クラス当たり平均履修者数：21.8人

[2. 授業中に利用した設備 (括弧内は利用クラス数)]

A) 機器

- | | | |
|-----------|-----------|--------------|
| ・貸出PC (6) | ・ビデオ (3) | ・プロジェクタ (10) |
| ・プリンタ (2) | ・コピー機 (2) | ・その他 (0) |

B) 施設

- | | | |
|----------|----------|----------|
| ・図書館 (3) | ・AV棟 (0) | ・その他 (0) |
|----------|----------|----------|

[コメント]

- ・貸出PCには毎回バッテリー切れのものが何台もあり、バッテリー交換の作業の時間を費やした。プロジェクトを用いるときスクリーンに不具合があった。
- ・教室設備の問題あり。PC対応の方、がんばってはいたがいろいろ問題あり。(PC設定、等)
- ・教務の方でもっと担当向けの案内をきちんとしてほしい(設備、規則、など)
- ・学生に文献検索を図書館で行なうように指示はしたが、講義時間中に図書館は利用しなかった。
- ・もっぱら毎回資料を配布して、それを基に講義、討論、演習を行いました。
- ・プリンタ(6号館1階):使おうとしたけれど出力できなかった
- ・6号館にコピー機はあるのですか?

[3. 授業の方法] (括弧内は実施したクラス数)

A) 授業形態(回数は大まかでよい)

- ・講義(12) ・ビデオ(3) ・演習/実験(2) ・討論会(9)
- ・インターネットによる調査(5) ・発表会(13) ・フィールド(2)
- ・その他(2)

B) 用いた資料

- ・プリント配布(13) ・ビデオ教材(4) ・プレゼン資料を準備(8)

C) TA

- ・TAを利用(4) 実施クラスはほぼ10回全部に利用

D) グループ分け

- ・グループ分けをした(10クラス) 2~6人 × 3~9グループ

E) 学生の参加形態

- ・討論(10) ・司会(1) ・グループ調査(8)
- ・PCでプレゼン(8) ・講義(3) ・その他の発表(8)
- ・学生間相互評価(7) ・その他(2)

F) その他工夫したこと

- ・教官の講義の際には、黒板に板書を行い、学生の発表の際には、学生が書いたレポート/レジュメを印刷して配布。
- ・学問は、自分ひとりで行なうべきと考え、グループ学習は行ないませんでした。
- ・最初に本科目に対する学生の興味と期待をアンケート集約し、授業計画を立てた。
- ・講義担当者は春休みに江戸東京博物館並び書店に出かけ、講義資料を収集した。これらの経験は、講義資料提供や学生間討論での助言として有効であった。
- ・分野の違うTAの協力により、最新の都市再計画の内容や現状について学生に的確な情報提供が出来た。
- ・毎回の討論の結果を各班から出させる。翌週に教員がコメントを書き入れて返す。
- ・可能な限り理系と文系を混ぜたグループとした。
- ・討論しながら「目次を作る」ことで、議論の発散を防いだ。
- ・発表を2回にして第1回発表に対する自己評価、他者評価を行い改善点を検討させた。
- ・グループの入れ替えを3回やって、他の学部学生とのインターアクションを活性化した
- ・10週の内1週を講義、4週を個人調査によるレポートと発表、5週をグループ調査によるレポートと発表とした。

- ・授業の形態は次の通り。計6回の課題を課した。プリントの簡単な解説+PCによる実習+学生による課題の発表
- ・討論の準備（ブレインストーミング）としてKJ法を試みた。

【コメント】

- ・積極的な学生がいるグループはうまく進む
- ・全体に目配りするにはTAがあった方がよい場合もある。
- ・インターネットとは、審査が行なわれない文章が掲載されているので、これを用いることを厳禁した。学問を行う為には、ある時期には生硬な文章を読解する過程が必要不可欠であると考え。研究発表の際に用いる資料は、書籍以外認めなかった。
- ・あまり厳しいことは言わず、積極的に発言しやすいような雰囲気作りを心がけた。毎回、机を丸く並べ、講義とは違う会議のような形で行った。
- ・毎回（合計11回）の講義の流れです：討論のための基礎的知識の解説を30分程度、残りの時間を班毎のグループ討論、班代表者の討論結果の発表、全体討論最終回は、全員が3分の発表を行いました。
- ・学生相互の討論はあまり活発ではなかった。
- ・数が少ないのですべての学生の関わり方を把握できたし、そのために「さぼる」学生が出なかった。仕事の分担も平等にできていたようだった。

【4. 評価の仕方】（括弧内は実施したクラス数）

A) 合格・不合格の判断に利用

- ・出席状況（15）
- ・発表状況（10）
- ・レポート提出（8）
- ・都市文明講座レポート（5）
- ・質問／討論への参加（6）

B) 合格の場合の成績（優良可）判断に利用

- ・出席状況（12）
- ・発表状況（14）
- ・レポート提出（10）
- ・都市文明講座レポート（4）
- ・質問／討論への参加（9）

【コメント】

- ・自分の発表を一回でも無断欠席した場合には、不合格とした。
- ・26人なので一人当たりの発表の機会、時間が少なかった
- ・都市文明講座レポートは、基礎ゼミ受講の「免許証」として確認したのみ。
- ・当然ながら、グループの中でリーダーシップをとる学生とそうでない学生ができるが、それで評価を違えることはしなかった。あくまで、まとめ役とそれに意見を出す、双方の役割とも重要だと考えたから。分担作業に著しい不均等があれば口を出そうと思っていたが、おおむね上手に分担していた。
- ・最後の発表後に添付の「評価票」を全員に記入させて、それと、出席状況および教員の個別評価を加えて最終成績とした。その結果、各自の成績は、自班への評価（班員はすべて同点）25点、他班からの評価（班員はすべて同点）30点、自分自身への評価15点、出席点30点、教員の個別評価15点、の合計115点満点で、100点に換算して決めた。
- ・都市文明講座レポートは提出があれば全員10点満点としたが、成績評価基準がはっきりしない。

【5. 全体評価】

A) 基礎ゼミという授業の意義

- a) 意義が大きい（3）
- b) 一応意義がある（8）
- c) 見直しが必要（3）
- d) 全く意義なし（1）

[理由]

- ・あくまでも数学に関しては、中途半端(c)
- ・学生一人一人のプレゼン能力が養える(b)
- ・他と異なる授業形態としての意味がある。やり方は工夫が必要(a)
- ・他学部・他コースの学生を含むグループでの調査・発表を通じて、学生相互に友好的関係が築けた。パワー・ポイントを用いてのpresentationを学ぶことが出来、将来きっと役に立つと思う。(a)
- ・自分が概念として持ち合わせていない新規な分野について、講義履修という形で興味を持つ事は重要であると思う。ただし、どのような場合であっても、大学で行なうからには「学問」として行わなければならない。カルチャーセンターのような雰囲気だけを経験する学問ごっこであるならば、基礎ゼミは必要ないと考える。今後も継続して行なうのであれば、学問として行なうべきである。(b)
- ・基礎学力がなければほとんど無意味だと思います(d)
- ・自分でものを考える力、表現力、コミュニケーション能力を鍛えることができる(a)
- ・今回はたまたま人数が少なかったため、全員が個別の内容で、他人をあてにせず自分の力で調査し発表することができ、学生も達成感があったように思える。平均の人数が25名というのは、ゼミという科目では多すぎるのではないか。(c)
- ・今回は広範囲のテーマであったが、学生が持つ興味の視点のずれ、基礎素養の違いなどがあったため、講義担当者の意図が伝わらずに空回りした部分が多かったため(c)
- ・まだ、評価は難しいと思う。教員側の位置づけ、学生の心づもりが不明だから。ただし、学生が楽しそうに、しかも熱心にやっていたことから、今年はまあうまくいったかな、と思っている(b)
- ・自ら調査・レポート・発表する体験をさせたこと、今後の授業・実験等のために効果があると期待されること。(b)
- ・自発的に調べたことを発表することの教育効果が期待できる(b)
- ・プレゼンの良い練習になる(b)

B) 都市文明講座の意義

- a) 意義が大きい(0) b) 一応意義がある(2) c) 見直しが必要(9) d) 全く意義なし(2)

[理由]

- ・私が学生だったら、意義がない、と感じたと思う(c)
- ・ゼミとの関連性が全く無い(d)
- ・市文明講座レポートを読むと、多くのことを学び取っているように思われる(b)
- ・とりやめても問題なし。やるとすれば基本から考えなおす。(c)
- ・レポートを提出されても、どのような講義内容かもわからないので、添削できない。(c)
- ・全くかみ合っていないと思います(d)
- ・そのようなスタイルも経験しておくのはよい。(b)
- ・基礎ゼミとの関連性が希薄、評価システムの不整備(c)
- ・1つの科目の中で、初めに行う都市文明講座と、その後に行う基礎ゼミとのつながりがよく分らない。(c)
- ・都市文明講座との関連性が明確でない。都市文明講座のレポートを基礎ゼミ担当者に提出されても評価のしようがない。授業科目として分離すべきでは？(c)
- ・レポートとして何を要求するか学生に明示する必要がある(c)
- ・入学時の学生に対する動機付けにほとんど働いていない(c)

C) 学生の反応

- a) 高い評価(4) b) 一応評価(5) c) 学生からは不評(0) d) 反応なし

- ・学生の感想として勉強になったよりも楽しかったという方が多かった。ただ、レポートの書き方や、発表の方法は非常に参考になったとの感想もあった。
- ・少人数参加のクラスであり、すべての講義回数をこなす事は学生にとってかなりの負担を強いる

(それでも、学生は三回のレポート提出+研究発表を行なった)。従って、最後の二回は中止したため、アンケートを実施できなかった。

D) 設備、環境、事務の対応など

a) だいたい満足 (7) b) 評価できるが不十分 (5) c) 基本的な検討が必要 (3)

- ・ ホワイトボードのペンのインクが、毎回切れており、板書をまともに行なうことが極めて困難であった。(d)
- ・ 狭すぎて、プロジェクターを中央におくと、学生がまともにすわれない。(d)
- ・ だいたい満足 (教室が狭く受講者で席が満杯になる。初回のためかPCに不具合が多発した。後半になってある程度改善はされた(a))

E) 担当者ご自分の判断は？

< だいたい成功・満足という意見と、改善点が多く残されたという意見が半々 >

- ・ 「ブレインストーミング」「ディスカッション」「レジュメづくり」「パワーポイントによるプレゼンテーション」など、目標としたことは一応やったのだが、毎回試行錯誤だった。「技法」を学ぶのか、調査内容を深めるのか、自分自身で迷いながらだったと思う。
- ・ ある程度最初のゼミのねらいどおりができたが、改善点として、調査方法がPCからのWeb検索が主体となり、図書館利用などは学生が消極的であった。また、討論・相互評価に参加する学生が限定されたこと
- ・ はじめてのため負担は大きかったが、それなりの教育効果はあったと感じる。

[コメント]

- ・ 天井にプロジェクターを設置し、スクリーンに投影するようにして欲しい。206号室は28名が定員で、プロジェクターを置くスペースが無く、机の配置を換えるなど苦労した。何らかの対策を講じていただきたい。
- ・ 9名のゼミでは、学生の負担が大きく、気の毒だった。クラス分けを、もう少し考えて行なってもらいたかった。
- ・ 2名では全く成り立たなかった。最低人数を決めるべき。
- ・ 反省点：受講生に調査、資料収集等の作業を課さなかったこと。井戸端会議に陥るのを防ぐためとはいえ、学生同士の討論に口を出しすぎたかもしれない。
- ・ 人数が多いので、セミナー形式ではなく、通常の講義の形態にするべきだったと反省しています。数学では、「一般教養的」にするよりも、たとえ学生に評判が悪くても、「専門的」にする方が長い目で見れば、学生のためになると思います。
- ・ 教員の負担が前期に集中するのは問題である。
- ・ 1年生ということで手探りで始めたが、最後のグループ報告では皆、上手にパワー・ポイントを使って見事な報告をしてくれたので安心した。
- ・ これまで受け身の勉強を主にしてきた学生が、自分で問題を設定し、調べて発表するということが、どこまで出来るか不安であったが、パワーポイントという便利なソフトができたせいもあり、内容的には未熟で中身もどこまで理解しているのか不明の面もあるが、一応それなりにもっともらしく発表していた。高学年になれば発表の機会は増えてくるので、低学年のうちに、このような経験をしておくのは、よいことだと思われる。
- ・ 教員学生共に、本ゼミナールを受け止めるのに数回の無駄をした。今後は見直しも含めて改善または廃止を検討する必要がある。
- ・ 発表や討論に適切な時間を取るためには受講者28名では多すぎる。多くとも20名程度とすべきである。
- ・ 南大沢の施設状況を知らず、自分自身が計算機IDを持っていない中でやるのが辛かった。

***** (アンケート集計：ここまで)